

男は、部顧問の先生から選手として活躍できる場が与えられた。しかし、Q男が「今の私」に「自信がないから選手にはなりたくない。」と心のうちを表現していたので、日ごろの熱心な練習振りがQ男の生き方の1ページであり、部顧問の先生をはじめ部員もQ男を認めているのだからこの機会を大切にするように、また、上手や下手は問題ではないと励ました。その結果、他者に認められることの大事さが理解できるようになり、最近では人前でも自信を持って発言するようになり、笑顔でいることが多く見られるようになった。

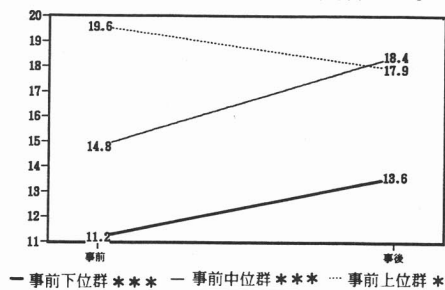
＜Q男の「自分を知らう」の作文より＞

・・・何かあるとすぐ弱気になってしまいました  
が、これからはもう少し強気になっていきたい  
と思います。・・・・・・・・・・・・・・・・

(5) 生徒の変容と考察

① 学級について

今回の実践のねらいに基づいて、意識調査3の1, 3, 4, 5, 6の5項目総点による変容の様子を分析したところ(図Ⅲ-5), 上位群においては指導援助の効果はマイナスに作用したが、他の2群においてはいずれもプラスに大きく変容した。中・下



図Ⅲ-5 自己理解に関する学級の変容

ま と め

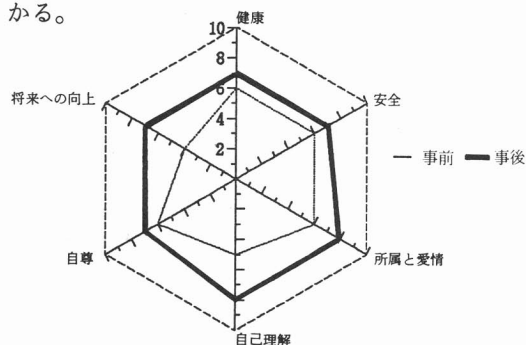
「自己理解を深めるための指導援助」の実践を通して次のことが分かった。

- (1) 生徒自身が自分の特性に気づき、その特性を他者、特に教師に認められることにより、いっそう自信をもつようになる。その結果、学習への取り組みや特別活動などへの参加意欲が高まるようになる。
- (2) (1)の効果は、教師と生徒の日ごろの人間関係において、特に学級経営における「所属と愛情」の充足により、より効果が期待できる。
- (3) 自分の特性について理解しているとは必ずしも言えない生徒にとって、教育相談的な指導援助はとも効果がある。
- (4) 自己理解がかなり深まっている生徒は、自己理解を深めるほどに自己を厳正に理解できるようになることが分かった。

位群が自己をよりいっそう肯定的・積極的に理解しようとする眼と心が養われてきたことを意味していると考察できるのに対し、上位群は自己を今まで以上に厳しくかつより客観的に理解するように成長したためと考えられる。

② L男について

中位群のL男にとって「自己理解」が深化したことは、図Ⅲ-6からも明らかのように、少なからず他の要点へも好影響を及ぼしていることが分かる。



図Ⅲ-6 L男の変容

③ 指導者の感想

生徒一人一人に対する指導援助の在り方を追究しこれを実践することによって、生徒一人一人を意識して見るようになった。そのため、指導者自身が生徒一人一人の反応を今まで以上に敏感に感じることができるようになり、生徒の変容に気づく眼がよりいっそう養われた。

また、今回、特に3群を意識して指導援助に当たったことは、学級集団を同一視せず、生徒一人一人を大切にする上で欠かすことができないアプローチであると思われる。